

あの頃の彫刻と音楽と

TAKESHI

私の二回目の個展(ときめ画廊)「丸弾けは愛」

一九八〇年 その頃現代美術はどのようなものであったのか、またその頃にはどのような音楽界であったのか？

自分の作品をふりかえって思い出すを書こうと思う。

まず美術界は、その派「ポストモンの派」「インスタレーション」「ミニ・ペインティング」「キネティック(コンピュター・ビデオ)アート」

それそれ注目され、現代美術と言われるようになった。

さて、私の作品はどのようなものであったかを説明しようと思う。

タイトルは「丸弾けは愛」このタイトルは「ふりむけは愛」の頃を

にしている。アートとは、私にとって怒りであり、あとの怒りなのだから、

彫刻作品であり、展示方法もインスタレーションとして見せる

コンセプト(思考)で成立させたかった。

今までの彫刻作品は台座の上に置いて一点一点を見せる展示が

ありましたが、インスタレーションの展示とはどのようなものか、

作品と設置するることによって、異空間をつくる事もしくは、

画廊空間をすべて作品としてとりこむ方法であると思う。

わかり易い言う画廊に自分の部屋を持ちこんで展示

する仮想現実空間をつくる行為と言いたい。

あゝ意味舞台美術、建築家に近い意識、行為ではないかと

思えば正しいか理解して欲しい。

どのような彫刻(インスタレーション)であつたのかを具体的にしよう。

まず彫刻は、丸太  をななめ切りにして二つの形にしよう

のような形を、指先の丸部分を削ぎ、残る三割

部分を丸の形で仕上げました。なぜこの形に私がこだわったか

と言うと、磨く行為が必然な形にこだわりました。

作品の完成をめぐり磨きは、わかり易い図式であるが、

素材を生かす事すなわち磨きでは無いと言った事を

私はコンセプトとしてありました。また丸は、動物(生き物)が産まれて

それからの道、具や武器として造形的で、美しいと思つた

からである。ひとりで丸と云うてしまふと単純に人間のもの

とか形を想像してしまふと思ふが、私のつくる丸はそれと全然個性をもつた形として表現しています。ハナタの丸は、約三年間つくつた丸のつたので、その後の丸シリーズとして、つなかりたいと思います。一九八十年から九十年まで約八百と、の丸をつくりました。このシリーズの間に「三角関数」と「ときめMIND」を「不列(UNREITS)」

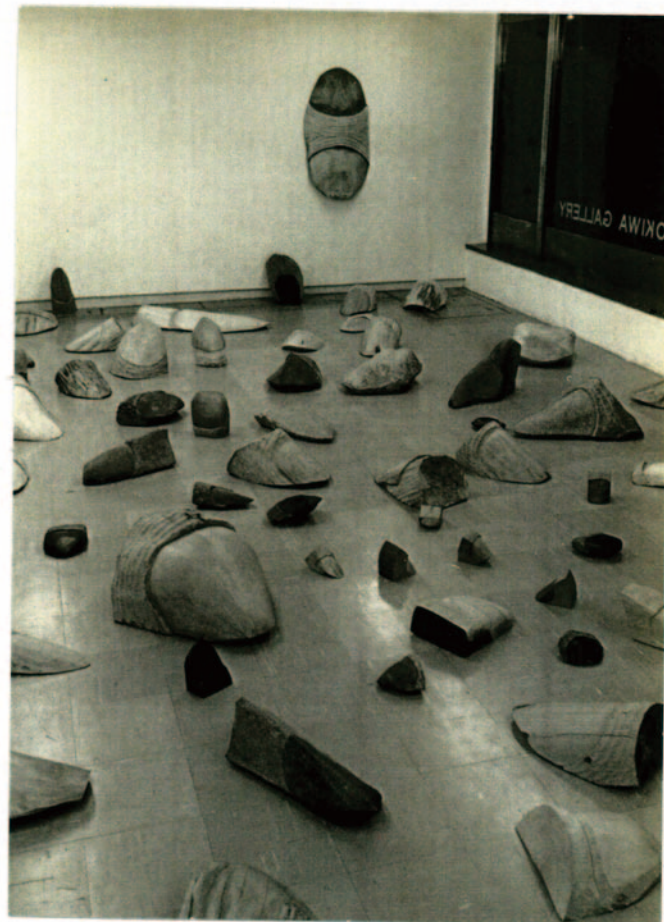
(I)



Vol-1 武田守弘展「石弾けは愛」
1980年10/13~18 くとわ画廊

「きかからないなら」 「木列 (KIERETSU)」 「Compo Stone」 「SEEK ERTSU」 等があります。
さてこの乱れちかじのような展示になったのかを書かねばならない。私は彫刻
を軽いイメージにしかつた。ここでかじやれを言うところカルチャーをおもちゃ
にしたいのである。作品を波状にセッティングして、動きのある作品
を考えました。(I)の写真で、理解してもらえらると思います。
また同じ作品でも(II)の写真の展示によつて作品のおもしろさ
が違ってくるのです。(II)の作品タイトルを「乱にバラバラ...という感じ」
ではまると思います。現実にはこの展示はしていません。
この頃(七八の年)音楽界はどうなつたかを書こうと思つたのは、私は
作品をつくる時に音楽を聴く事によつて、仕事はかじつたと
言つても過言ではなかつた。特に「ニュー・ミュージック」 「シティ・ポップス」
と言われた音楽が魅力であり、同世代のアーティストがこの時代に
デビューしただけでもある。ユーミン、サザン、佐野元春、シャネルズ、
山下達郎、この世代では、Y.M.O、大瀧詠一、オフコース、E.C.C
特に、私の好きなアーティストは、元はつないえんどの大瀧詠一である。
テレビのCMでは、流れない日がないと思われ、日本初のCDアルバムとして
有名な「ロビン・バグ・シモン」の中にある「君は天然色」が有名であるが、
それよりも彼がサウンドクリエーターとしてプロデューサーとして活躍しているから
である。知る人は知るあの山下達郎を世に送り出した人物であり、
アメリカン・ポップスをナイアガラサウンドとして、ヒット曲を生み出した人物である。

この場で彼が作曲をして有名な曲を聴きたタイトルをそれらを
羅列してみたい。サブソングからコミックソングまでと彼の多才な一面がわかるで
しょう。
吉田美奈子「夢で逢えたら」(76) 太田裕美「さうばシベリア鉄道」(80)
シリア・ポール
鈴木雅之「C.M.ソング(本人)」(73) 小林進一「冬のソング」(82)
三宅サイター「C.M.ソング(本人)」(73) 小泉今日子「夫は盗ルビイ」(88)



1980年「石にバラバラ...という感じ」
くまの画廊

ランスタ「Tシャツに口紅」(83)

「星望のサーカス」

小林旭「熱き心に」(85)

沢田研二「おの娘に御用心」(75)

クレージーキャッツ「聖平行進曲」(78)

植木等「新五万節」

「サーフィン伝説」(75)

「針切太郎さんのロケン・ホール講座」(75)

大瀧詠一「知らない人には、ひひの十四年に発売されたC.D.アルバム

「365のA/N」を聴けば、誰でも彼の音楽や人物に共感心

すると思います。この文章を書いている時に、テレビから偶然

大瀧詠一の新しいアルバム「音の流れてきて、はっくりしました

六年ぶりのアルバムにも期待しようと思ふ」。

美術界も音楽界もハイテクな技術があることも、最後はその

作品に魂が込められているか人間の魅力によって感動させる

れるのではないかと思ふし、古くとも良いものは良いと思ふし。

古くとも新しいの加理解されれば良いと思ふし。

ある意味ピカソを越える事か出さないので現代の作家も

知れません。もしもピカソが生きていたら……

(2000年三月記)